

20

廃校寸前となった日本医学専門学校の学校騒動への 山県有朋・入沢達吉等の圧力

山本 鼎, 唐沢 信安, 殿崎 正明, 幸野 健, 志村 俊郎

日本医科大学 医史学教育研究会

はじめに

日本医学専門学校の学校騒動に関しては、私立日本医学校設立者・山根正次の医学教育の失敗（日本医史学雑誌 2005; 51(2): 218-219）、藩閥政治の日本医学校に与えた影響：日本医学校創立者山根正次校長と苦難の学校経営（日本医史学雑誌 2009; 55(2): 155）、磯部検三と加藤時次郎について（日本医史学雑誌 2010; 56(2): 256）と三回にわたって報告してきたが、この度日本医科大学の135年の歴史の中で済生学舎に引き続き再び廃校寸前となった経緯について新たな知見を加えて論じる。

学校騒動 日本医学専門学校在卒業と同時に無試験で開業資格を得られる文部省指定校認定を得られないのは、明治43年朝鮮総督府衛生顧問となった山根正次校長から経営を任されていた磯部検三が設備の改善をしないことと大正3年突然始まる磯部検三と瀧澤竹太郎理事との権力闘争、社会主義的思想をもつ磯部がいる間は文部省が認定しないことから、大正5年5月16日学生四百余名が総退学し、日本医学専門学校在廃校寸前となる。それら学生の保証人会には、頭山満（福岡）、井上角五郎（広島）、中濱東一郎（高知）、茅原廉太郎（東京）、奥宮衛（海軍少将）等が名を連ねていた。一方で時の文部大臣高田早苗は、政治家、財界、教育者、医者等からなる諮問機関「日本医学専門学校評議委員会」を組織させ、廃校寸前の学校運営、財政再建に乗り出す。

入沢達吉 入沢達吉は、医術開業試験が廃止となった大正5年の10月日本社会学院第四回大会に於ける「医学教育の統一に就いて」という演説の中で、医師一人当りの人口の割合を比較して欧米が2,000人以上に対して日本は1,266人と医師数が多すぎるとし、医学専門学校程度の新しい学校を設立することは必要ない、文部省は寧ろ此の上医学校の新設を許さない方がよいと述べている。しかし、一方で日本医学専門学校の学生四百余名が大正5年5月16日総退学を執行し、医学専門学校創立のための協賛委員を募った際に同年12月16日までに入沢達吉は協賛委員となっており、その言動が一致していない。

また、大正11年2月1日山県有朋が逝去した後、大正15年2月25日日本医学専門学校在日本医科大学に昇格した際に、同年5月7日上野精養軒での日本医科大学開学披露祝賀会で入沢達吉は日本医科大学万歳を三唱している。

高橋琢也 日本医学専門学校在退学した学生達の中で第2学年の広島出身長秀三美（ちょう・いさみ）は、芸備医会の責任者尼子四郎（広島医専出身）宅を訪れ、「高橋琢也という義侠にとんだ先輩がいる」と紹介される。東京医学専門学校創立委員長となった高橋琢也は、山県有朋と組んで兵制改革にあたり、兵部大丞、貴族院議員、男爵となった芸州藩士船越衛の援助を受けて開成学校でドイツ語を学び、明治3年12月大学南校出仕得業生准席、明治5年から明治18年まで陸軍参謀本部翻訳局で西周の下で働く。明治28年農商務省山林局長、大正3年沖繩県知事、同5年4月妻富士子死去。同年6月長秀三美らの訪問を受け救済に乗り出す。過去のキャリアを活かして国家からの材木の払い下げを受けてそれを売却して東京医学専門学校創立資金の一部を調達する。同7年4月13日東京医学専門学校設立、初代理事長、同8年貴族院議員、昭和10年1月20日死去。

まとめ

山県有朋は、北越戊辰戦争で思わぬ苦戦を強いられ、慶応4年5月13日の朝日山の戦いにて無二の親友時山直八を失った事に対する河井継之助への怨念を長谷川泰に向けて展開して済生学舎を廃校に追い込み、再び長谷川泰の息のかかった学校・日本医学専門学校在を潰しにかかった経緯と一方では救済に拘っていると思われる経過について報告した。